

## 一 川副荘と干拓事業

### 中 世

現在の佐賀県領域内で最も古い武家は、佐賀郡の高木氏である。源頼朝が平家を討伐すると、高木・龍造寺・国分・草野・綾部の諸氏は源氏に味方した。頼朝は建久三年（一一九二）天野遠景を鎮西奉行とした。同七年（一九六）にはその後任として、武藤資頼・大友能直・島津忠久の三将を命じた。武藤資頼は大宰の少弐（大宰府の次官）に任ぜられ、以後この職は代々武藤氏に世襲された。のち武藤氏はこの官名をとって少弐氏と称した。源頼朝は文治元年（一一八五）諸国に守護をおいたが、肥前守護は筑前・豊前とともに武藤氏が就任した。但し永仁五年（一二九七）以後は、鎮西探題職が兼務することになった。また、各所の荘園には地頭がおかれたが、治承・寿永の乱で藤原季家が平家に味方しなかったということ、今までどおり佐賀郡龍造寺村（現佐賀西高等学校付近）の地頭に任命された。この藤原季家が戦国大名の龍造寺氏の祖である。

鎌倉期の諸富町一帯を知る史料に『高城寺文書』がある。高城寺は佐賀郡大和町大字久池井字春日にあり、春

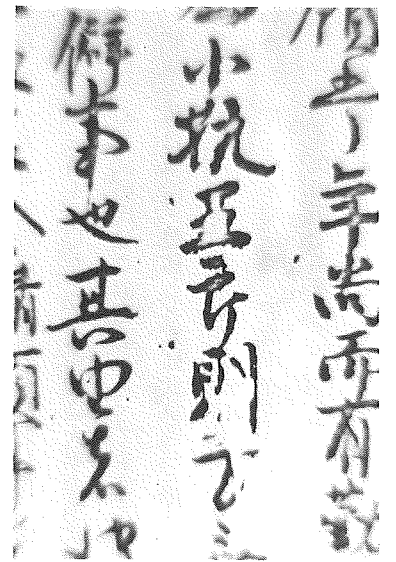


現在の多聞院

ばならない。

当町為重には平氏に関係した伝承が残っている。平清盛が日向太郎通良追討で西下した際、その将平美濃守為重も同行してきた。為重は通良追討が終了すると、川副荘内に居住した。そこでこの地を為重と称することになったという。ところが、平氏が壇の浦の合戦で敗北すると、その落武者は四散し、人目を忍んで土着した。佐賀の地にきた落武者も多く、為重を頼つてきた三武将は京都の公家の出身であった。彼らは多くの家来の霊を弔うべく髪を切つて出家し、昌常寺・昌光寺・昌善寺の真言宗の三寺を建立したという。昌光寺と昌常寺は多聞院に合祠された。昌善寺はのち日蓮宗に改宗したが廃寺になったという。前述した『寺井由来記録』と共通した部分があり興味深い。

日山高城護国禪寺が正式な名称で、臨濟宗の寺院である。朽井(久池井)の地頭であった国分忠俊が、文永七年(一二七〇)に建立し、寺領と本尊阿弥陀如来を寄進した。鎌倉幕府の執権北条泰時・時頼の追善供養を行うということで、幕府の手厚い保護を受けた。寺領の寄進も広範囲にわたり、特に川副荘内の未開低湿地(干拓地)が寄進され、幕府の祈禱所となつた名刹である。同寺文書中の「極楽寺免田文書案」に、



「極楽寺免田文書案」に記載されている小杭五郎則方の名

右、謹検案内、彼寺免田内、於件坪者、依有由緒、自先地頭御代官連栄大法師手、讓得領掌年尚、而有勤無怠、然間、去一兩年、俊宗在京之跡仁、為小杭五郎則方、無指由申掠、令致其妨之条、不及言語僻事也、彼免田立用者、星霜良久、則方之光永名令請預事者、近年也、設則方請負之後、所被立用雖為免田、地者領家地頭御進止也、者兩方御判明白之上者、則方何口自由可申掠哉、此条尤垂御察、任證文之道理、蒙御裁許、為令領作、子細粗言上如件、

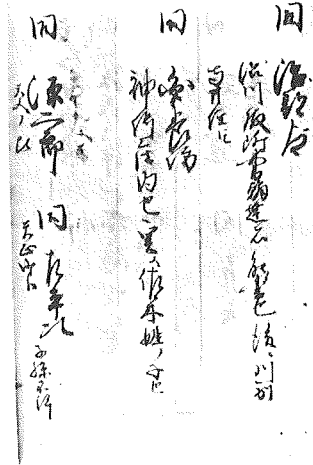
(一二七七)  
嘉祿三年二月十五日

藤原俊宗 上

とある。川副荘の「地頭御代官」である「上座蓮栄大法師」なる人物が、「米津里卅六坪」<sup>(三七)</sup>一町を極楽寺に寄進し

た。ところが、田所<sup>たどころ</sup>の藤原俊宗と小杭則方が極楽寺免田一町をめぐる争っている。小杭五郎則方は当町小杭を本拠にしていた中小名主層の武士であろう。この極楽寺は弘安三年(一二八〇)十月五日付の「法橋明尊讓狀案」に「為大勝大夫(大江広元)殿御願寺」とあり、川副荘の惣地頭であり、源頼朝の側近で政所<sup>まんどら</sup>の長官(別当)であつた大江広元によつて建立された寺院である。さらに、『高城寺末寺帳』によると、同寺が当町の大堂に存在していた。「法橋明尊讓狀案」によれば、明尊の「肥前国河副本庄極楽寺別当職、同免田等」を弟子尊然に譲り与えているが、尊然はこの極楽寺別当職以下を永仁四年(一二九六)二月十八日に「高城寺長老」へ寄進した。つまり、最終的に極楽寺別当職は高城寺に帰属することになった。この過程で仲介者として注目されるのが、北条氏一門の大仏朝房である。大仏朝房は弘安十一年(一二八八)から正応三年(一二九〇)まで、大江広元の跡を継いで川副荘の惣地頭職を有している。高城寺が弘安十一年(一二八八)二月に「関東(鎌倉幕府)御祈禱所」に指定されたことも、大仏朝房の働きかけがあつたのであろう。

これら一連の史料によれば、幕府の要人政所別当の大江広元の発願によつて建立された極楽寺が大堂にあつた。その時期は承元二年(一二〇八)より数年前と考えられる。大江広元の地位から判断して、極楽寺は名にふさわしく大伽藍の壮大な規模であつたろう。しかも、同寺は「河副荘内」とある。平安末期に出現した川副荘は次第に荘域を拡大し、一三世紀初頭には大堂付近までも荘域化したことがわかる。であれば、一三世紀初頭は当町の大半が川副荘であつたことを示している。しかも、その荘域内に小杭五郎則方という武士が居住し、荘園領主側の勢力と抗争していることを証明している。寛政四年(一七九二)の『川副東郷小杭村』(佐賀県立図書館所蔵)絵図によれば、小杭は典型的環濠集落をなしており、専念寺や白石大明神(現小杭公民館敷地)がある。これらが小



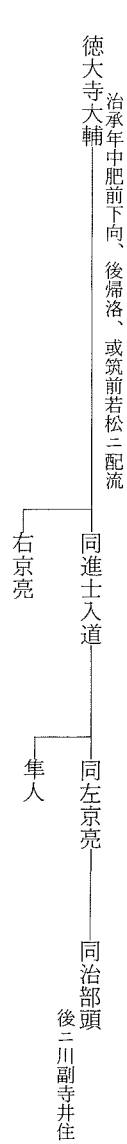
「肥陽諸系図」の徳大寺氏系図  
(佐賀県立図書館所蔵)

とある。徳大寺式部大輔が治承年中(一一七七〜八〇)に下向し、その曾孫徳大寺治部頭が川副莊寺井に住んだという。この徳大寺氏も川副莊に何らかの関係をもつ下級公家出身だったのであろう。『太宰管内志』には、「図書編、其北為肥前、横直皆五百里、其奥為鐵來」とあり、鐵來は弓良伊と読ませている。つまり、寺井は明朝(一三六八〜一六四四)の中国で既に知られており、川副莊を代表する良港であったことがわかる。

『高城寺文書』の「沙弥某寄進状」によれば、寄進

肥前国春日山高城禪寺

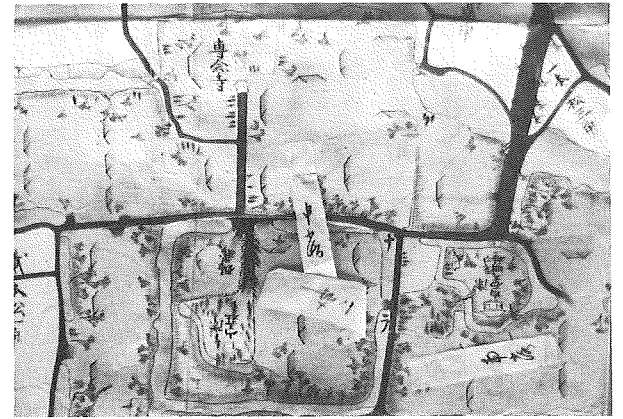
同国河副庄内東故衛西故衛松丸等尻荒野事



川副莊の有力な港が寺井であった。一三世紀半ばの肥後国山北西安寺(現熊本県玉名郡玉東町)石堂碑文には、「相良宗頼領地」として「肥前之寺井」とある。相良宗頼は遠江国(現静岡県)より下向し、人吉地方一帯を本拠とした御家人である。川副莊に肥後の御家人の所有地があるということは、武士による川副莊の侵蝕が進んできたとことを証明している。また、『肥陽諸系図』の「徳大寺系図」には、

ておきたい。

『武雄鍋島家文書』の正応二年(一二八九)の「蒙古合戦勲功賞神崎莊配分状」には、「蒲田郷鳥喰里」とあり、蒲田津付近も神崎莊の一部になっており、佐賀江以北は神崎莊で、以南は川副莊であろう。つまり、佐賀江が神崎莊と川副莊の莊境だったと考えられる。



小杭氏の本拠地(『川副東郷小杭村絵図』)

杭氏の氏寺、氏神ではないかと考えられる。専念寺の現在の住職は小杭正見氏である。同家は中世の小杭氏の氏寺の血筋者ではないかと考えられるが確認する史料がない。小杭氏の館は村中央の山王社付近にあったと推測される。当時既に大堂や小杭の地名が存在している。大堂の地名は当地に阿弥陀堂をもった大寺があったところから、大きな阿弥陀堂をもつ寺より大堂の名が出たものである。ともかく、川副莊と密接な関係をもつ極楽寺の存在は銘記し



専念寺と18世住職の小杭正見氏

東北限 本作土居

四至 西南限 南里江底

右志者、奉為、(北条時宗)法光寺殿御菩提、限永代、所寄進也、然者庄家亘承知、勿令違失、仍寄進之状如件  
(二二八八)弘安十一年正月十八日

沙弥(花押)

とあり、川副莊のうち東・西故衙(こが)の荒野を沙弥某が高城寺に寄進している。さらに同文書の「肥前国守護北条為時寺領寄進状案」には、

寄附、春日山高城禪寺

肥前国河副庄三分一方、米津土居外旱瀉荒野耆所事

限東 米津并東故衙土居

限南 米津土居

四至

限西 南里前通旱瀉

限北 南里土居

(中略)

(二二八八)  
正応元年十一月七日

(北条為時)  
前遠江守平朝臣 在判

とある。前遠江守肥前守護北条為時は、当時勢力の強かった鎌倉幕府の祈禱所高城寺に川副莊内の「旱瀉荒野」

を寄進した。その地域は、東に米津(米納津)から東故衙(東古賀)にいたる土居(堤防)があり、南に米津のところ土居があり、北は南里のところに土居があつて、西の方に干瀉が広がるがっていたと考えられ、コの字形の土居に囲まれた地域であつた。北条為時はこの土地を新しく田地として開き、僧侶の食料にあて、その功德で亡き執権北条時宗の菩提供養とすることを願っている。これらの史料よりみれば鎌倉中期の現川副町地域は、干瀉・荒野または芦野のような状態を含む陸地化寸前の、しかも農業生産の可能な土地になりつつあつたこと、また土居をつくり海水を防ぎ、人工的に干拓をはじめたことが推測される。諸富町一帯は一部干拓があつたかも知れないが、その大半は筑後川の堆積作用によって形成されたもので、自然的な陸地化現象によるものだったであろう。また、その陸地化も川副町一帯よりも相当古いと考えられる。

## 二 諸富氏の入封

諸富氏の入封

大堂神社所蔵の『六所大明神由緒書』によると、弘安二年(一二七九)に同社の神殿・楼門を諸富氏が創建したとある。この由緒書の詳細の真偽については検討の余地があるが、六所大明神(大堂神社)と諸富氏との密接な因縁が理解できる。元来大堂神社は筑後川沿いにあつたものを、江戸時代になって鍋島氏によって現在地に遷座したとの説もある。現在の町名も諸富氏に由来するのである。諸富氏は筑後国三瀬郡諸富村(現福岡県大川市大字酒見)に本拠をおく武士である。『肥陽諸系図』の「諸富之系」によると、筑後国在住の諸富氏の一族が鎌倉期に